

帝都地下迷宮

中山七里

第六回

3

結局、その日はまんじりともせず朝を迎えた。

永沢と別れてから自宅に戻り、見慣れた部屋にいても落ち着くことができない。着ていた服の一切合財いっぺいがっさいを洗濯槽に放り込み、強めのシャワーを全身に浴びても爽快感などひと欠片もない。膝から下の震えは収まったものの、輝美の死顔を思い出す度に嘔吐感おうとかんが押し寄せてくる。

あの死体を二人で担かいだのだ——自分の両手に鼻を近づけて臭いを嗅かいでみる。シャワーですつかり洗い流したはずなのに、何度も嗅かぎ直してしまう。気になって気になって、また洗面所に直行し、手の皮が擦り切れてしまうほど洗う。

死体についての知識はないが、運んでいる最中に薄々気がついた。輝美の口や鼻腔、そして耳から洩れてくる異臭。汗の臭いでも血の臭いでもなく、こちらの胃の中を攪拌するような刺激臭。

永沢も気がつかないはずがない。それでも二人とも敢えて異臭に言及しなかったのは、輝美に対するせめてもの敬意だったと思う。

だがこうして一人きりになると、死者への敬意よりも生理的な嫌悪感と罪悪感が優先する。

罪悪感。そうだ、さつきから背中に纏わりついて離れない粘りの正体は罪悪感だった。いくら「エキスプロロー」の存在を隠蔽するためとはいえ、本人の意思を無視して遺体を移動したことは輝美を侮辱することになりかねない。

いや、それよりも地下空間の中にいるかもしれない犯人を消極的に庇うことになるから、二重の意味で輝美を裏切っている。輝美の冥福を祈ってやりたいところだが、やはり猜疑心が先に立つ。

自分はいったいどこまで「エキスプロロー」に加担すればいいのか、それとももう引き返せないところまで来ているのか。

そこまで考えてぞっとした。何が引き返すだ。既に死体遺棄の片棒を担いでいるではないか。

たちまち恐怖が罪悪感にとって代わる。人通りに防犯カメラの有無。熟慮に熟慮を重ねたつもりだったが、本当に大丈夫だったのだ

ろうか。自分の知らないうちにカメラの一台くらいはどこかに設置されていなくだろうか。死体が発見されたら、すぐにも小日向の部屋に警察がやってくるのではないか――。

こうしてつらつら考えている間に夜が明けてしまったのだ。

目が冴えて神経も昂たかぶっているので眠たくはない。しかし決して快適なはずもなく、小日向は顔を洗ってワイシャツに着替えても昨夜からの気分を振り払えずにいる。

普段通りにしようと思掛けたが、いつもより早く部屋を出たのは現場を確認しなかったからだ。放っておけともう一人の自分がしきりに警告するものの、確かめずにはいられなかった。

輝美の死体は無事に発見されたのだろうか、それともまさか消えてしまったのではないだろうか――少し考えてみれば一笑に付してしまうようなことまでが疑心暗鬼ぎしんあんきになる。

相変わらず、行くなという警告が頭の中で鳴り響いているが、足は遺体を遺棄した場所へと向かう。そう言えば、犯人は必ず犯行現場に戻ってくるなどという話があるが、満更嘘まんざらではないと思つた。自分の仕出かしたことを誇りたいのではなく、唯々不安なのだ。

通勤の経路と別方向の神田多町かんだたちょうへ向かう。中央通りの歩道は神田駅を目指す通勤客でいっぱいになっていた。小日向は彼らに紛れて歩調も合わせる。

例の定食屋の角を曲がり、現場へと足を向ける。置き去りにした死体そのものを見るつもりは毛頭ない。発見されたかどうかを確認したいだけだ。

やがて小日向は視線の彼方に望んでいた光景を目撃した。死体を置いたと思しき場所がブルーシートのテントで覆われ、その周辺を制服警官たちが取り巻いている。濃紺の作業着を着ている男たちは鑑識の人間だろうか、這いつくばるようにしてやはり現場周辺に集まっている。

無事に死体が発見された安堵と、自分に疑いが掛からないかという不安が同時に訪れる。現場に来ても来なくても不安なら、いっそ来なければよかったと思ったが後の祭りだ。とにかく確かめたのだから踵を返したその時だった。

「ちよつと」

背中に声を浴びせられ、思わず声を上げそうになった。ゆっくり振り返ると、そこに警官が立っていた。

「通勤途中ですか」

口調そのものは穏便だが、有無を言わさぬ雰囲気は権力を持つ職業ならではのものだろう。小日向は自然体を心がけようとするが、どうしても身構えてしまう。

「ええ、まあ」

「この先に行かれるんじゃないですか。どうして回れ右したんですか？」

方向転換したところを見られたのなら否定はできない。ここはいつたん認めた方が得策だろう。

「お巡りさんが大勢いたら、やっぱりビビっちゃいますよ」

「別に交通規制している訳じゃありません。野次馬みたいに騒がないのなら、どうぞお通りいただいて構いませんよ」

警官は促すように手をブルーシートのテントへと向ける。

「いや、ここを通るつもりはなくて。中央通りを歩いていたら人だかりが目についたので、何だろうと思っただけなんです」

「じゃあ寄り道ですか。朝の通勤時に、よくそんな余裕があります

ね」

「いや、今日は早めに家を出たものですから」

「早めに家を出たのはどうしてですか」

「まずい。」

質問に答えれば答えるほど警官のペースに乗せられていくようだ。

「あの、そろそろ行かないと遅刻しそうなんです」

「余裕をもって家を出たんじゃないんですか」

「思った以上に時間を食っちゃって」

すると警官は矢庭やにわに右手を差し出した。

「身分を証明するようなものをお持ちですか」
状況はどんどん悪化していく。

「あの、これって職務質問なんでしょうか」

「そんな大層たいそうなものではありませんよ」

警官は表情を変えることなく淡々と話すが、質問される側の小日向は心臓はやかねが早鐘を打っている。ここで身柄を確保されでもしたら、緊張と恐怖に耐えきれず何もかも喋ってしまう不安があった。

何としてもこの場をやり過ぎさなければ。

「あの、ホントに時間がないんで勘弁してもらえませんか」

「三十分ほどいただければいいんですけどね。すぐに終わりますよ」

「あのですね。三十分も遅れたら会社に連絡しなきゃいけなくなり
ますよ」

「じゃあ、お勤めが終わってからでも結構です」

終業後に交番まで来てほしい——そう言われると思ったが、警官はすうっと右手を差し出してきた。

「何か身分を証明するものをお持ちですか」

「いえ、あの」

「これから出社しようとする人が身分証を所持していないはずはないですよね」

しまった。

この場で職務質問を受けるのと同等の仕打ちではないか。身分を知られたが最後、好きな時に呼び出され、好きなように扱われる。絶対に渡しては駄目だ。

だが差し出された手が身分証の提出を催促する。

「早く。時間がないんですよ」

余裕さえ見せる警官が憎たらしくなる。それでも一般市民の小日向には抗あらがう術すべがない。

「さあ」

再三の請求に抵抗できず、小日向は渋々身分証しふしじょうを差し出した。

「ほお、保健事務所にお勤めですか」

警官は慣れた手つきで身分証の内容を手帳に書き写していく。実際には数十秒の時間が、まるで三十分ほどに感じられる。

「はい。ご協力、感謝します」

警官から身分証を戻された時、同時に敗北感と疲労も受け取ったような気がした。

警官はまだこちらを見ている。小日向を疑っているのか、それともただのルーチンとして身分を書き留めたのかも判然としなかった。

「どうしました。会社に遅れますよ」

「あ、はい」

我ながら間の抜けたような返事をして元来た道に戻る。地面から

は陽炎かげろうが立っているというのに、肌あわだが栗立たっていた。

警察に不審な人物として特定されてしまった。遅かれ早かれ事情聴取に呼び出されるだろう。

背筋おかんにぞわぞわとした悪寒おかんが走る。

振り向くと、警官はまだ小日向を見ていた。普段の通勤で銀座線は利用しないが、人の波に逆らったのでは疑惑みくを膨ふらませるばかりだ。遠回りの経路になるが、人波に従った方が利口くだろう。自分が神田駅に向かうのを見れば、警官も小日向がただの野次馬だと思い直すかもしれないではないか。

小日向は人波に吞まれるようにして銀座駅に辿り着く。すっかり通い慣れた一番出口からホームに下りる。地下空間への入口でもある証明写真ボックスを横切る際、久ジイや永沢、そして香澄たちが頭あたまを過すったが、連絡はばかを取ることも憚はばられたのでスマートフォンは開かなかった。

何とか始業時間に間に合い、午前中は申請者さばを捌はく作業ぼんごさつに忙殺まじされた。今日ほど忙しいのを有難いと思つたことはない。頭と手を動かしている間は不安も恐怖も忘れていられる。

集中力が途切れたのは午前の部が終了した直後だった。節電で庁舎内の冷房は抑えられており、気がつけば額ひたいはじつとりと汗ばんで

いる。休憩室に入ってネットを検索すると、案の定、輝美の件がニュースで報じられていた。

〈神田で女性の死体発見〉

ネットニュースの常で見出しはそれほど大きくない。これが新聞であれば、どれくらい扱いになるのだろうか。

〈本日早朝、神田多町で女性の死体が発見された。年齢は三十代から四十代、頭部に殴打された痕跡が残っていた。現在、被害者の身元は不明であり、警視庁は広く情報を求めている〉

小日向は我が目を疑った。

身元不明だと。

身分も氏名も不明だと。

久ジイとの打ち合わせでも特に輝美の身元を隠すという意見は出なかった。だから死体を移動した時、ちゃんと警察手帳は服のポケットに忍ばせておいたのだ。死体の着衣を探れば、たちどころに輝美の氏名も身分も判明するはずだった。

それが身元不明とはどういうことだ。

頭が混乱して、しばらくは思考が纏まらなかった。自分と永沢が手を汚した仕事のはずなのに、まるで記憶を塗り替えられたような違和感が付き纏う。

自販機で買った冷たい缶コーヒーを一気に飲み干してみる。暑さ

とニュースの内容で沸騰気味だった思考がいったん冷却される。

深く嘆息たんそくすると、ようやく落ち着きを取り戻した。

改めて考えてみると、現段階で思いつく可能性は次の二つだった。

一 小日向たちが死体を置き去りにした後、何者かが着衣から警察手帳を奪い去った。

二 死体にはちゃんと警察手帳があったのに、警察が発表しなかった。

二つの可能性を比較すると後者の確率の方が高いように思える。警察にしてみれば身内の殺された事件であり、しかも公安部の刑事だ。公安部の刑事が何を探っている最中に殺害されたのか、あれこれ邪推じやすいされるのを嫌がったのではないか。そもそも、何故（エクスペローラー）の中に公安部の刑事が紛れ込んでいたのか、久ジイたちですら解明に至っていないのだ。

警視庁公安部が意図的に輝美の素性すじょうを隠したのだとしたら、その目的は何なのか。憶測おくそくの域は出ないものの、やはり（エクスペローラー）の捜査に絡とらんでと考えられる。いったい公安部は（エクスペローラー）をどんな集団だと捉えているのだろうか。まさか久ジイたちが憤慨ふんがいしていたように彼らを極左集団の一つと照準を定めているのか。それこそ冤罪えんざいというものだ。彼らは高速増殖炉の事故で故郷を追われ、そればかりか事故の後遺症で太陽の光を浴びることさ

え叶かなわなくなってしまうた、言ってみれば流浪るろうの民だ。しかも、彼らをそうさせたのは他ならぬ国の方策ではないか。

つらつら考えていると恐怖心を押し退けて、憤いきどおりが胸に満ちてきた。輝美の素性を隠したと思しき警察にも腹が立ってきた。

「どうしたい。えらく深刻そうな顔してるじゃないか」

いきなり話し掛けられて思考が中断した。振り向くと、声の主は見知った先輩だった。

「瀬尾さん」

「邪魔か」

小日向が返事をするのも待たず、瀬尾は隣に腰を掛ける。強引さが瀬尾の身上しんじょうだが、この時ばかりは勘弁してほしいと思った。

「ミスったか」

申請受理のことだと分かっている、どきりとした。

「ミスはなかったと思います」

「元気がないように見えたもんでな」

「僕って普段からテンション低めですよ」

「そうか？ ここ最近逆調子よさげだったじゃないか」

「でしたか」

「どんな日いわくつきの申請者を目の前にしても、嫌な顔一つしなかった。それどころか、何とか申請を受理させようと課長に捻ねじ込んで

いた。お前があんなに熱血だったとは知らなかった」

瀬尾も自分の業務をこなすのに忙しいだろうに、よく観察している。小日向は内心で舌を巻いた。

「熱血とかそういうんじゃないくて、ただその日の気分だったと思いますよ。ムラっ気あるんですよ」

「ムラっ気で、あそこまで食らいつければ逆に大したもんだ」

瀬尾はこちらの反応もお構いなしに、懐ふところから取り出したタバコを啜くわえる。

「あ。喫+うぞ」

「嫌だって言っても喫うんでしよう」

「嫌ならお前が席を立てばいいだけだろ」

火を点つけて一服。ただし小日向から顔を背そむけて煙を吐くのは、せめてもの遠慮といったところか。

「お前さ、自分で思ってるほどいい加減な人間じゃないからな」

瀬尾はこちらを向かずに話し続ける。

「テンション低いとか言う割には仕事にも人にも真面目だ。距離を置いているようで、気がつくともチャクチャくつついている」

「褒めてくれたって何も出ませんよ」

「心配するな、ここから貶してやる。見掛けによらず熱血なのはいいが、自分の熱にのぼせて回りが見えなくなる。俺や課長の顔が見

えなくなる。ついでに自分の行き先も見えなくなる」

「行き先くらいは……」

「いいや、見えていない。見えていたらちゃんと危険水域の手前で止まるはずだが、お前は止まらない。方向転換しようにも、勢いがつき過ぎているから曲がらない。それで玉砕する」

「玉砕なんてしたことないですよ」

「今まではな。きっとそういう機会がなかったんだろう。機会がなかったから教訓もないし、他人の警告も役に立たない」

「悲観的なことばかり並べ立てないください」

「そう思うんなら、せめてブレーキくらいは整備しておけ。止まるべき時にブレーキが効かなけりや谷底に真つ逆さまだ」

警告を発してくれているのは有難かったが、どうせなら死体を運ぶ前に聞きたかったというのが本音だ。

「よく分かりませんが、肝きもに銘めいじておきます」

言い残して、小日向は先に席を立つ。瀬尾も見掛けによらずお節介なところがある。このまま隣に座っていたら、無理やり秘密を打ち明けさせられるかもしれなかった。

休憩室を出る際、不意にちりちりと首の後ろがざわついた。不安を覚えた時の癖くせだったが、その正体は小日向本人にも分からなかった。

判明したのは午後の部が始まって間もなくの頃だった。申請者の相談に乗っていた時、山形課長がまるで担任に呼び出しを食らった中学生のような顔で駆け寄ってきた。

「小日向くん。いったい何を仕出かした」

「はい？」

「今、警察の方が見えてだね、君に会いたいと言っている」

途端に、己おのれの顔が強張ったのを自覚した。山形どころではない。きつと悪戯いたずらを見咎みとがめられた小学生の顔をしているに違いない。

喉元を締めつけられたような錯覚さっかくに陥おちいる。呼吸が浅くなり、次第に視野が狭くなっていく。

「応接室に待たせてある。とにかく来てくれ」

「まだ相談中で……」

「そんなもの、誰かに代行させる。すぐに行ってくれ」

申請受付の業務を「そんなもの」と言いのける神経に引っ掛かりを覚えたが、今はそれどころではない。小日向は息苦しさを堪こらえながら席を立った。

「後できちんと報告し」

背中に山形の指示を浴びたが、最後の方はよく聞き取れなかった。

応接室へ向かう途中で逃げ出そうとも考えたが、同じフロアの廊下一本で繋がった部屋だから逃げ道はない。第一、逃げたとしても

すぐに追いつかれてしまうだろう。

応接室の前では二人組の男たちが待ち構えていた。背丈や体格は違えど、油断なさそうな面構えはそっくりだ。

「小日向巧さんですね」

背の低い方の男が尋ねてきたので、慌てて頷いた。

「お仕事のところを申し訳ありません。少々お伺いしたいことがあります」

二人は応接室に入れという仕草をする。途轍もない威圧感を覚えたものの、この期に及んで逆らう術もなく、小日向は指示される通り部屋に入る。中央のソファに座るとドアが閉められ、緊張が最大となる。二人の男は小日向の対面に腰を下ろした。

まず背の低い男が警察手帳の提示とともに口を開いた。

「柳瀬といます。こちらは柳矢」

紹介されても柳矢は頭一つ下げようとしめない。無言でこちらを睨むだけなので、威圧感に加えて不気味さまで漂う。

「課長さんには詳しく申し上げませんが、我々は警視庁公安第一課の者です」

胃の中身が逆流するかと思った。

今の今まで所轄の神田署か、さもなければ警視庁でも刑事部の捜査員だとばかり思い込んでいたのだ。しかも公安第一課といえば、

輝美と同じ部署ではないか。

「今朝、メトロの神田駅付近で女性の死体が発見されました。ご存じですか」

ネットニュースで取り上げられた時点で秘密ではなくなっている。

ここは惚けない方が却って安全だろう。

「さつき、ネットのニュースで知ったばかりです」

「さつき？」

いきなり柳瀬は片方の眉を吊り上げた。

「妙ですね。小日向さんは今朝の通勤途中、まさにその死体発見現場で警官から職務質問されたのではなかったのですか」

しまった。

「いや、あれはお巡りさんたちが集まっていたから傍に近づいていただけで、死体があったなんて全然知りませんでした」

「現場はブルーシートで覆われていました。それでも死体があると
は考えなかったと？」

「知っていたら近づきませんよ。死体なんて気味が悪いじゃないですか」

「それにしただって妙ですね。あなたの住んでいるアパートから役所までは都営新宿線で一本でしょう。どうして違う路線の銀座駅に向かっていたんですか」

一瞬、言葉に詰まったが、すんでのところで言い訳を思いついた。
「月に何度かは早めに家を出て、色んな駅を見て回るんですよ。今朝は銀座駅とその周辺を観察した後で、いつもの路線に戻りました」
「何だってそんなことを」

「趣味です。僕は鉄道オタクなんですよ」

訝いぶかしげな顔をした二人に対し、小日向は畳み掛けるように言う。
「子供の頃からの、年季の入ったオタクです。嘘だと思ったら部屋を見てください。鉄道関連のグッズでゴった返してますから」

「鉄道オタクというのは車両に乘ったり撮ったりじゃないんですか」

「そんなことはありません。撮り鉄・乗り鉄・音響鉄・車両鉄・模型鉄・収集鉄・駅鉄・線路鉄など、鉄オタの種類は三十を優に超えます。僕はそのうちの廃駅鉄で、多少駅鉄も兼ねています。この駅鉄というのは駅の周辺なんかを散策して、その佇たたずまいを愉たのしむというもので、朝の通勤風景を眺めるのが僕は好きなんですよ」

趣味の話に抗弁に利用するのは、我ながらいいアイデアだと思っただ。知り抜いた知識だから澱よむみなく話せるし、鉄道オタクなのは本当だから小細工こざいくもしなくて済む。

予想通り、柳瀬と柵矢は困惑顔を見合わせていた。まさかこんな返しがあるとは想像もしなかったに違いない。

「銀座駅周辺の通勤風景を眺めに行った途中で警官たちの姿を見て、ふらふらと現場に近づいた。そういう説明ですか」

「ええ、何か野次馬根性を發揮しちゃって」

「殺害されたのは我々の同僚でした」

柳瀬の顔つきが変わる。元々抜け目のない目に昏い光が宿ったように見える。

「名前は黒沢輝美。いや、あなたなら既にご存じのはずだ」

否定しようとしたが、すんでのところで思い留まった。輝美が公安の刑事であつたのなら、地下で知り得た情報は細大漏らさず公安部に報告していたとみて間違いない。当然その情報の中には（エクスポローラー）たちの個人情報も含まれているはずで、侵入現場を捕獲された小日向の身分など真つ先に知られているだろう。とすれば、今の小日向にできる抗弁は現場にあつた死体が輝美だったとは知らなかった——そう言い張るくらいだった。

「死んでいたのは輝美さんだったんですか」

今度は我ながら白々しい惚け方だと思つた。柳瀬たちの目にどう映るかはともかく、小日向としては苦しい限りだ。

苦しいのは白々しいからだけではない。こちらの本心が見透かされはしまいかという不安で、心臓が高鳴っている。相手に聞こえそうなほどの鼓動で、口から溢れるのではないかと気が気ではない。

それでも平静を装って対応し続けなくてはならない。容疑者というのは大変なのだ、妙なところで実感する。

束の間、二人の刑事は小日向を正面から見据える。虚実を見極めようとしているのか、四つの目はまるで猛禽類のそれだ。小日向は腋の下から、つと嫌な汗が流れるのを感じた。

「知りませんでした。知っていたら、お巡りさんの手を振り払ってでもお悔やみの言葉を掛けていました」

「黒沢とは顔馴染みだった。つまり小日向さんは地下住人の一人であることを認めるんですね」

「ええ。彼女とは地下で知り合いましたから」

「偶然、萬世橋駅に下りたところを住人たちに発見された。そうでしたね」

「輝美さんから、そういう報告がされたんですね」

「鉄道オタクが昂じての違法行為という説明だったが、どうもわたしたちには納得がいきません」

柳瀬の目が槍のように小日向を射抜く。視線が実体化すれば間違はなく自分は串刺しになっているように思えた。

「本当のところはどうなんですか。どんな目的でへクスプローラーの住処を調べようとしたんですか」

「どんな目的でって……あの廃駅に人が住んでいるなんて想像もし

ませんでしたよ。知っていたら、そんな物騒ぶつそうな場所に立ち入るものですか。いくらオタクだからって、命を危険きけんに晒さらすようなことはありません」

正確せきを期するなら、そういう無鉄砲なオタクも存在ひんしないではないが、これは言わぬが花だ。

「地下空間に下りた理由はそれでよしとしましょう。では、黒沢の死にあなたは関連かんれんしていませんか」

「あの、輝美さんは殺されたんですか」

「まあ白々しい質問だったが、これは小日向から訊ねた方が無難だろう。柳瀬は無念にんさを滲にじませて浅く頷いた。

「殺されて、現場に棄て置かれた。まだ若い女に酷ひどいことをする」
棄て置いたというのはあんまりな表現だったが、言い方の相違さむだけで行為自体は変わりない。柳瀬たちの怒りは正当なものだ。

「もう一度お訊きします。黒沢の死に、あなたは関係かんけいしていませんか」

「していません」

「では、黒沢を最後に見たのはいつですか」

ここからだ——小日向の緊張は最高潮に達する。

「ちよっと記憶あいまいが曖昧あいまいですけど、昨日は会っていません。それよりも前です」

「記憶にないんですか」

「あそこに行くとは昼夜の感覚が麻痺まひしてしまうんです。だけど昨日ということはないです」

実際、昨夜輝美を見た時にはもう冷たい死体だった。従って証言自体に虚偽はない。

「小日向さんは（エクスプローラー）をどう捉えていますか」

意外な方向からの質問だった。柳瀬の真意を計りかね、小日向は自然に身構える。

「どんなんて…：特別な病気に罹かってしまった不運な人たちだと説明されました」

「それはわたしたちも同じ報告を受けています。色素性乾皮症でしたか。数年前、八ヶ部町はちかべまちの高速増殖炉の事故に端たんを發しての特定疾患だとか」

「ええ、それで太陽の下では生活できなくなったそうです」

「どこまで信用できますかね」

「え。でもちゃんと専属のお医者さんが」

「その医者がぐるになっていいる可能性は捨て切れない」

柳瀬の言葉は猜疑に満ちていた。だが、その意味するところが小日向には充分理解できない。

「彼らが医者と結託して僕を騙だましたっていうんですか。どうしてそ

んな回りくどい嘘を吐く必要があるんですか」

「後ろ暗い目的を持った集団は常に何かを隠し、常に何か別の衣を

装よそおおうとする」

柳瀬の目はますます昏さを深めていく。

「我々警察が一番憎む犯罪は何だか知っていますか」

「殺人、ですか」

「一部、当たりです。我々警察官が一番憎むのは警官殺しです」

その途端、無言でいた櫛矢もかっと目を見開いた。こちらも相当に執念深そうな憎悪に凝り固まっている目だった。

「仲間を殺やった犯人を我々は決して許さない。一課のみならず公安部の総力を挙げて、彼女の仇かたきを取る」

お前が殺したのだろうと言わんばかりの目が四つ。小日向は反射的に視線を逸そらしてしまった。

「お気持ちは理解しますが、僕も輝美さんとは深く話したことはないんです。だから協力できることはあまりありません」

「いや、ある」

柳瀬は言下げんかに否定した。

「小日向さんは〈特別市民〉だそうじゃないですか。それなら彼らの内情にも通じているはずだ。〈エクスプローラー〉の中で、誰か黒沢をつけ狙っていた者に心当たりはありませんか」

「いや、それはっ」

小日向は慌てて手を振る。

「僕だって住人全員を知っている訳じゃありません。ホント、ごく一部の人と話ただけで」

「話した相手の中に、不審な人物は」

「いや、不審も何も、素人の僕には何も判断できませんよ。ただの不運な人たちとしか認識していませんし」

「生活保護申請の窓口に座っていると、そういう目で人を見てしまいがちになるんでしょうな。だが我々の見方はずいぶん違う」

「どう違うんですか」

「闇は大概たいがいのものを覆い隠す。地下空間に広がる広大な闇。人はもちろん物騒なものも大量に持ち込める」

「……彼らがテロを企くわだてているとも言うんですか」

「彼らには政府に対する恨みもある。百人程度とは言え、強い結束力もある。別の言い方をすれば、強い信念を持った百人は容易に軍隊を構成できる。誰か専門知識を有する者が一人でもいれば、容易にテロを起こせる」

初めて柳瀬の言説に逆らいたくなくなった。

太陽の下をまともに歩けない病人揃い、高齢者揃いの百人を軍隊と呼ばわるのか。生活保護の申請書さえまともに書けない者の集団

をテロリストと呼ばわるのか。

一瞬、笑いが込み上げたが、眼前の二人が今にも小日向を絞め殺しかねないような顔をしていたので思い留まった。

笑いを噛み殺した顔を深刻さと勘違いしたらしく、柳瀬はこちらを下から覗き込むように睨めつける。

「あなたが黒沢殺しに加担していないというのなら証明してほしい
ものですね」

「証明って、どうすればいいんですか」

「簡単です。情報提供なり何なり、我々に協力していただければ
いいですよ」

柳瀬はやっと笑ってみせた。口角を片方だけ上げて頬を緩める。
しかし目だけは全く笑っていないので、逆効果だった。

「要するにスパイをしろ、ということですか」

「もちろん、あくまでも協力要請ですから無理強いはしません。た
だし」

ただし、に強いアクセントが置かれた時は大抵碌な話ではない。
山形との報告・連絡・相談で嫌というほど思い知らされている。

この場合も例外ではなかった。

「あなたがいくら身の潔白を声高に主張されても、わたしたちの抱
く心証は改善されないでしょうな」

まるでお役所言葉みたいな脅し文句だと思ったが、相手も自分も同じ公務員だという皮肉に気がつく。

ようやく落ち着きを取り戻しつつある頭が計算を始める。臆病者のする計算。だが臆病者だから生存率は高い。

「分かりました。捜査に協力します」

おそらくこちらの反応を予想していたのだろう。小日向の返事を聞くと、二人の刑事はにこりともせず頷いた。

「ただ、今はちよつと頭が混乱していて整理ができそうにありません。明日以降まで待ってもらってもいいですか」

「それは構いません」

柳瀬は鷹揚おうように言った。

「こちらも情報は正確な方が有難いですから」

「僕からも質問していいですか」

「答えられることなら」

「ネットニュースでは輝美さんの名前も身分も伏せられていました。

これはそちらの意向なんですか」

「そう考えていただいて結構です」

警察官が何らかの事故や事件で落命した時には素性が公表される。

今回それがないのは、やはり公安部という部署の特殊性なのだろう

と小日向は想像する。

「でもですね。警察は（エクスポローラー）の誰かを疑っているようですけど、当然容疑者はそれ以外にも考えられるでしょう」

「ほう。たとえば誰ですか」

柳瀬は小日向を試すような口調で訊き返してきた。

「たとえば刑事さんだったら悪いヤツらから逆恨みされることもあるでしょう。それに仕事とは無関係で、輝美さんのプライベートに関わるアクセシブルだったかもしれないじゃないですか」

「もちろん、その線でも捜査はしますよ。先ほども言いましたが、我々は仲間に弓を引いた者を決して許さない。必ず挙げて、法廷で相応の裁きを受けさせる。もっともその前に、頭と胸に溜め込んだ一切合財を吐き出させてからになりますよ」

いささか尊大な物言いだったが、少なくとも柳瀬個人が（エクスポローラー）以上に怪しい容疑者を考えていないのは明らかだった。加えて、柳瀬の尊大さにも理由があるように思えてならなかった。

「今朝、死体が発見されたばかりですよ。警察は何か有力な手掛かりを持っているんですか」

「捜査情報を洩らすことはできません。第一、まだあなたの容疑が完全に晴れた訳でもない」

「輝美さんの死亡した時刻が分かれば、僕もアリバイを主張できます」

「司法解剖の結果はまだ聞いていません」

ようやく小日向は思い至る。

殺人事件なら、同じ警視庁でも刑事部捜査一課の仕事ではなかったか。こうして公安部の刑事に乗り込まれているが、柳瀬たちは事件の捜査に直接関わっていないものと思われる。おそらく捜査情報は彼らなりのルートで入手しているのだろう。

「これは直に公表される情報なので言っても構わんでしょう。死体が発見されたのは神田多町で、黒沢の靴底には付近の土がたっぷり付着していた。傍目にはそこが殺害現場と映る。しかし、それは明白な偽装工作に過ぎない」

「どうして、偽装と言い切れるんですか」

「多町に限らず、神田駅周辺は今もそこかしこで工事を行っています。水道管の交換に光ファイバーの敷設、道路拡張工事。そのため中央通りから多町に入ると、どうしても掘り返された土を踏む羽目になる。ところが黒沢の靴底に付着していたのは現場周辺の土だけだった」

危うく小日向は声を上げそうになった。

「お分かりですね。普通に歩いていたら彼女の靴底には掘り返された土も付着していなければならない。それがなかったのは犯人と思しき者が、いったん靴底を洗い流した上で現場周辺の土を馴染ませ

たからです。言い換えれば、黒沢は死体発見現場とは別の場所から運ばれたことを意味する。全く杜撰な偽装工作ですよ」

柳瀬は含むところでもあるのか、顔をこちらに近づけて言葉を続ける。

「警察の科学捜査を舐めちゃいけない。犯人が予想もしない残留物は必ず存在する。髪の毛一本から着衣の隅々まで調べれば黒沢がいた場所も判明する。解剖すれば、どこで何を飲み食いしていたのかも特定できる。死体を運んだ犯人はしてやったりと思っているだろうが、縄は着実にそいつの首に掛かっているんですよ」

小日向の腋からは、また嫌な汗が噴き出していた。

4

事情聴取から解放されて自席に戻ると、山形が待ち構えていた。

「終わったんですか。いったい、何がどうなっているんですか。あなたは何を仕出かして、警察は何を調べているんですか」

山形はこちらの口が開くのを待ちきれないというように、矢継ぎ早に質問を浴びせかける。ただし、この男が心配しているのは小日向の身だとは思えない。小日向の行為によって生活支援課、延いては自分自身にどんな影響が及ぶかを危惧きぐしているに違いない。

廊下を歩いている時、既に弁明は考えていた。

「申し訳ありません、課長」

他の職員や一般市民が注視する中、山形に向かって九十度の姿勢で頭を下げる。

「僕の軽率な行動のためにご迷惑をおかけしてしまいました」

「ちよ、ちよっと小日向くん」

周囲の視線を意識したのか、俄に山形は慌て出す。この男が機先を制されると防戦一方になりやすいのは学習済みだった。

「実は出勤途中、事件現場に遭遇して……」

小日向は澀みなく説明を始める。野次馬よろしく現場をうろついていたら、警官に呼び止められて身分証を提示させられたこと。訪ねてきたのは警視庁の刑事たちで同僚殺しを捜査していること――。

しかし死体の主である輝美と自分が知己の仲であることと（エクスプローラー）の存在については言及を避けた。あくまでもとぼちりて疑われたのだと言い張った。生真面目な姿勢を見せたのは、その弁明に信憑性を持たせるためだった。

「以上そういう経緯で、事情聴取を受ける羽目になってしまいました。捜査が進めば疑いも晴れるはずですが、それまでは聴取が続くかもしれません」

山形は短く呻いた。

「事情聴取というよりも捜査協力と言った方が適切なケースという訳ですね」

「僕もそう思います」

「仕方ありませんね。捜査に協力するのは市民の義務ですから」

取ってつけたような言い方は、まさしく山形らしい。小日向はほつと胸を撫で下ろす。

「わたしも捜査が進展するのを期待しましょう」

「それと課長。事情聴取でひどく緊張しました。小休止をいただきたい方がいいですか」

「なるべく手短にお願います」

許可をもらうや否や、小日向はフロア端にある喫煙エリアへと急いだ。今日び全館禁煙が標準になりつつあるが、まだこの職場では徹底されていない。そして生活支援課でも喫煙者は山形と瀬尾くらいなので、今の時間は無人のはずだった。

受動喫煙を防ぐため、喫煙エリアはフロアから隔離され、その上アクリル板で四方を遮断されている。ここでなら多少の密談も可能なので、非喫煙者も時々利用している場所だった。

アクリル板に染みついたヤニ臭さに辟易しながら中に入る。辺りに人影がないのを確認する。既に柳瀬たちは帰った後だ。盗聴器を仕掛けるような時間はなかったはずだが、一応エリア内に視線を走

らせる。

大丈夫だ。そう判断すると、早速スマートフォンで香澄を呼び出した。

「香澄ちゃんか」

『小日向さん、昨夜はお疲れ様』

「永沢さんは」

『とても気疲れしたからって、今寝てる……はず』

「ネットニュース、見たか」

『見た。何よ、あれ。輝美さんの素性どころか名前まで隠してたじゃない』

「隠してただけだ。本当は全部バレている。死体を移動させたのも、〈エクスペローラー〉の存在もだ」

電話の向こう側で、香澄が息を呑んだのが分かった。

『どういうこと』

「殺される前、輝美さんはそっちの情報の一切合財を公安第一課に連絡していた。しかもタチの悪いことに、公安は君らを極左集団の一種と捉えているフシがある」

『極左集団で何よ。あたしがミサイル担いで首相官邸に突撃でもするって言うの。バツカみたい』

香澄は半ば憤慨し、半ば呆れているようだった。彼女の気持ちは

手に取るように理解できる。(エクスプローラー)を知る小日向も同じ気持ちだった。

「馬鹿らしいと思うのは僕も同じだ。だけど公安はそう思っていないらしい。死体を移動したことも地下に居住空間があるのも知っているから、そこに立ち入るのは時間の問題だと思う。僕もその、萬世橋駅に下りて君たちと遭遇したのは話しちまったし」

『あんなねえっ』

「怒るなよ。僕が白状する前に、どうせ輝美さんが報告しちまったんさ」

『あれ。でも待つてよ。そんなに前から輝美さんが地下のことを報告したのなら、どうして公安は今まであたしたちを放っておいたのよ。輝美さんの死体の件がなくても、あたしたちを極左だとか疑ってたんでしょ』

「あくまでも警察だから明確な証拠もなしに、立ち入ることはしないさ。それに君たちが極左集団である証拠を掴むために、輝美さんが潜入していたんだろう」

『……ホント、警察って馬鹿よね』

「それと、これは僕の推測だけど、神田駅からの出入口は君たちの方からでないとドアが開けられない。しかも一度に大勢は無理だ。公安にしてみれば、輝美さん一人を送り込むのが精一杯だったのか

もしれない」

『それはあるかもね』

「分からないのは、輝美さんが潜入した過程だ。彼女が公安の刑事なら、八ヶ部町の住民だったのは虚偽だったことになる。いったい誰をどう騙して潜入したのか」

自分で喋っておきながらどきりとした。自分を知る者が誰もいない中、元の住民だと言いつ張るには相応の根拠か、あるいは何者かの証言が必要になる。

ひよっとしたら（エクスポロー）の中に、輝美が八ヶ部町の住民だったと偽証する者がいたのではないか。

不意に思いついた疑念が水面に落ちた墨汁のように広がっていく。お蔭で小日向の胸は真っ黒だ。

「香澄ちゃん、みんなと一緒に逃げろ。そこは危ない」

相手を必要以上に煽らないよう口調を抑えたつもりだったが、香澄には効果がなかった。

『地上に出たら、あたしたちの皮膚は長時間保たない。そんなこと知ってるでしょ』

「でも逃げろ。今まで様子見に徹していた警察も、今度のこと地下に立ち入る大義名分を手に入れた。君たちが極左集団であろうがなかろうが、強制捜査に踏み切る」

『そんな無茶な』

「君たちには無茶でも警察には道理がある。僕の言ったことを今すぐ久ジイに伝えてくれ」

『待ってよ。いったいどこに逃げればいいのかよおっ』

切羽詰まった香澄の声に、こちらも追い立てられた。

「僕が知るかつ。君たちほど事情に精通してないんだ」

香澄に当たるのは詮無せんないことと分かっていたが、一度口をついて出た言葉は引っ込められなかった。

「間宮先生みたいに君たちの病気を知っている訳でもない。他の住人たちみたいに地下の生活を満喫まんきつしている訳じゃない。僕は……」

所詮、部外者だ——という言葉は慌てて喉の奥に呑み込んだ。

これは絶縁宣言だ。吐いてしまったが最後、香澄たちとの縁は途切れてしまう。

『僕は、何よ』

「僕は……ただの廃駅鉄だ」

自嘲じちよう気味に呟つぶやいたその時、脳裏せんにうに閃光せんこうが走った。

そうだ、自分は廃駅マニアだ。

廃駅については久ジイたちよりも、柳瀬たちよりも詳しい。詳しくなければマニアを名乗る資格はない。

『どうしたのよ、急に黙り込んで』

「ただの廃駅鉄だけど、役に立つかもしれない」

『今度は急に息を吹き返したみたい』

「少し時間をくれ。とにかく香澄ちゃんは、一刻も早く久ジイに相談してくれ」

『了解』

電話を切ってから、小日向はやニ臭い喫煙エリアの中で頭を巡らせる。

まだ東京が帝都と名乗っていた時代。

黎明期れいめいきの地下鉄が敷設と廃線を繰り返していたセピア色の時代。

小日向の脳裏には帝都あ在りし日の地下が広がり始めていた。

(つづく)